

第5回 おんかつアウトリーチカフェ 報告書

2015年6月23日 於：地域創造会議室

ゲストスピーカー：浜まゆみ氏（マリンバ）

進行：児玉真氏（地域創造プロデューサー）

浜氏は、おんかつアーティストとしては初めての打楽器奏者。自身の今までの経験から、アウトリーチの可能性、問題点、今後の課題等が、自作のパワーポイントで実際の事例を紹介するとともに取り上げられた。また今回は一方的な発表の場ではなく、参加アーティストそれぞれの意見交換の機会にしたいとの趣旨から、フロア意見も積極的に交えて進行された。

「音楽のアウトリーチで何ができる？」

アウトリーチを始めたきっかけ

大学4年生の時に地元の養護学校で演奏する機会があり、それが新鮮な経験であったこと、またその時の生徒さんの反応から人前での演奏の楽しさを再認識したことがきっかけ。ホールのように聴く体制が整えられた場所ではない所で音楽に集中してもらうことの難しさを感じるると同時に、もっと色々な場所で演奏したい、知らない場所で演奏してみたいという思いが強まった。地域創造アーティストとしての活動のおかげで、その思いを実現する多種多様な活動が可能になった。ホール職員やコーディネーター等が加わることで、自分一人では思いつかないような様々な見方を知ることができ、また、打ち合せを重ねることでかなり手の込んだ企画も実現できた。

アウトリーチの魅力とは

第一に、観客との距離の近さ。すぐに会話がしやすく、迫力が伝わりやすく、印象にも残りやすい。目の前で体験することの感動はより大きいと感じる。第二に、かしこまったコンサートホールではなく、身近な場所でリラックスして音楽を楽しめること。そして第三に、一つとして同じアウトリーチはないこと。予想していない質問を急にされる等、自分の想定と違う方に進んでしまうこともあるが、逆に流れに乗せられて上手くいくこともある。

フロア意見交換『アウトリーチの魅力についてどう考えているか？』

*野尻小矢佳氏（パーカッション&ボイス）：

目と目の会う近い距離での演奏に魅力を感じている。音楽の一步前に、音自体の面白さを知ってもらいたいと常に考えている。また、アウトリーチの機会をとおして、将来の夢について

思いを馳せるきっかけをつくる等の波及効果にも期待できると思う。そういった音楽以外での部分にも踏み込めれば良いと感じている。アウトリーチの目的について「音楽会に来てほしいからやるのか？」あるいは「音楽好きになってほしいからやるのか？」と問われることがある。勿論それも大切ではあるが、決してそれだけで終わりではないと思う。言葉にできないことを音楽で伝える、コミュニケーションの生まれるきっかけになれば嬉しい。

「今までに行なった印象的なアウトリーチ」

富士山の麓で

初めてのおんかつで、河口湖の高校生と協同し、野外ステージでの演奏を行なった。まずは、自然や動物について学ぶことで地元の自然の豊かさを理解するとともに、全員でゴミ拾いをし、それらを再利用して楽器を作った。その楽器を用いて、幼稚園生から年配の方まで参加する「みんなで作る森の音楽会」を実施。その成功の陰には、高校生との入念な打ち合せ、ホール担当者との度重なる話し合い等、多くの人たちの協力があつた。多くの人が巻き込まれたことで、結果的に沢山の人に興味をもってもらえ、音楽を楽しむだけでなく自分たちの町にある自然の素晴らしさやゴミについて見つめ直す機会となった。河口湖という場所に合わせた、河口湖だからこそ可能なアウトリーチだった。

樹齢五千年をこえた楠

武雄市にある楠は守り神として大切にされていた。この楠をアウトリーチで使いたいと考え、楠の神様のオブジェを子どもたちに事前に創作してもらった。5年生は落ち葉などを組み合わせて素敵なオブジェを用意してくれた。アウトリーチでは、それらをどのようなイメージでつくったのか問い、出てきた反応を元にピアニストの中川賢一氏と共に音楽で即興した。生徒さんの中に兄弟で在学している子がおり、おそらく家族で話題にする機会があつたのか、翌日の2年生のアウトリーチで、5年生と同じように即興をやってほしいというリクエストが突然出た。アウトリーチが、家族で音楽について語る機会となったことがとても嬉しかった。

エプロンとリズム

音楽を身近に感じてもらうため、キッチン用品を使って演奏を行なった。リズムパターンをいくつか作成し、班ごとにゲーム感覚で助け合いながらリズム練習をしてもらい、最後には衣装のエプロンをつけて全校生徒の前で本番。このような形は例外的だが、学校側から何とか音楽鑑賞会にできないかと強い要望があり、5年生へのワークショップの成果を鑑賞会で発表するという方法をとることにした。結果的に、他の学年の子たちから自分たちもやってみたいという声が出たため、アウトリーチを間接的に伝える機会ができたことは良かった。

「アウトリーチの問題点とその対処法」

〈問題1〉プログラムを作る際に「聞き慣れた曲を演奏してほしい」というリクエストが出るが、そもそも皆が知っているマリンバのオリジナル曲がとても少ない。

〈対処法〉アウトリーチが行われるまでの1ヶ月間に、給食の時間、清掃の時間、帰りの時間にオリジナル曲を放送してもらった。知らない曲でも、特に説明もなく耳に入るようにしてしまふことで、慣れてもらおうという発想の転換。学校側の協力体制が整えば可能な試みである。

〈問題2〉マリンバのオリジナル曲をもっと広めたい。

〈対処法〉まだクラシック自体に馴染みのない4～5歳を対象に、動物を描写したオリジナル曲「Frogs～蛙～」を演奏した。カエルは何をしている？という導入から入り、1回目はメロディに合わせてどんな動作をしているか頭の中でイメージしてもらいながら、2回目は曲に合わせてカエルになってみようという段階を踏み、同じ曲を2回演奏した。また、アウトリーチの最後に他のオリジナル曲も演奏すると、音楽への集中力が増し、喧嘩をしていた子どもたちも静かに聴いていた。

〈問題3〉子育て支援センターなど親と子どもが一緒にいる場合の子どもの集中力について。親と一緒にいると甘えてしまい演奏に集中できなくなる可能性がある。

〈対処法〉子ども（3歳以上）と親を敢えて分けて座るように配置。子育て支援センターの子どもたちは集団生活に慣れていないため、親と離れて座ることができるのか懸念があったが、結果的に問題なく音楽に集中してもらえた。親は子どもと離れてリラックスして聴くことができ、子どもも楽しんでいる様子だったため、思い切って試みて良かった。

他にも、特に、学校の授業外である学童保育のアウトリーチは難しかった。学校が終わった開放感と基本的には自由時間であることから集中させることは困難。授業と同じようにはできないため、遊びのように参加型にするなど楽しんでもらえる工夫を考える必要があった。

フロア意見交換『今までのアウトリーチで大変だったことは？』

*大熊理津子氏（マリンバ）：

プログラミングの工夫として、だんだん集中力を高めるのではなく一発目で引きつける勢いを大切にしている。無理を承知で弾いてもらう、あるいは楽器の組み立てをやってもらう等、普段とは違う要素を取り入れることも有効。

*浜氏：

野球少年を対象にアウトリーチをしてほしいという依頼を受けた時は大変だった。ホール担当者の要望で、普段最も音楽から遠い少年たちにアプローチしたいという目的があった。そこで、楽器の素材の話など野球との共通点を一生懸命探し、甲子園を想定してリズムに合わせた入場行進の練習などを行なった。反応は良好で、スポーツとリズムとが結びつき、結構楽しかった、興味が持てたという声も聞いた。

*松本蘭氏（ヴァイオリン）：

沖縄の離島で全校生徒10人くらいの学校があった。良い意味で外部と隔離されているような環境で、生徒たちはとても純真だった。その純粋な感性ゆえに、全てを見透かされてしまうような感覚があり、逆に怖いと感じてしまうくらいだった。

*新居由佳梨氏（ピアノ）→*高見信行氏（トランペット）：

ボロボロのピアノでの演奏。動かすと分解してしまうような楽器や固定されていて動かせないものもある。学校は基本的に教育的見地から動くので、音楽サイドから考えるとあり得ないことも常に想定していなければならない。

「今後のアウトリーチでやってみたいこと＝コラボレーション」

他の楽器と

他の演奏者の、自分とはちがったアプローチを間近に見るチャンスでもある。楽器が増えることで、一人で演奏するよりも可能性が広がる。

楽器以外の分野／芸術と

影絵師と一緒に、音楽絵本「マリンバのおいたち」を創作。マリンバの歴史を元にオリジナルストーリーを作った。コンサートでは影絵用のスクリーンを用意し、生演奏と生の影絵と朗読とコラボレーション。人形が手拍子を誘うなど音楽と関連した参加型のコンサートができた。この事例のように、様々なアートとの競作で幅を広げたい。

複合的なテーマを取り入れる

河口湖で行なったアウトリーチのように、音楽と自然とのコラボレーション等も行ないたい。音楽をやりながら違うテーマを考えられるような、純粋に音楽を伝えるアウトリーチから発展させたものをやりたい。勿論音楽の楽しさを伝えることも大切だが、別のテーマと組み合わせることでより重要性や必要性が高まるのではないか。例えば、科学館でのアウトリーチでは、

目で音を確認する実験などを行ない、科学的な立場から音楽へ興味をもってもらいたい。逆に音楽から科学に興味を持つきっかけになるかもしれない。互いの分野が助け合う関係のアウトリーチは有意義だと思う。

その場ならではの色々なテーマと絡めていくことで、今後のアウトリーチはより活性化されていくのではないか。また、アウトリーチづくりにおいては、地元の人との話から自然に起こってきたアイデアも多いため、会話を重ねることで見えてくるものや得られることを大切にしていきたい。

*児玉氏：

音楽の分野でも、ダンスや演劇で当たり前に行なわれている「ワークショップ」をより普及していく必要があるかもしれない。ワークショップは1回で完結するものではなく、事前に何回か接触して綿密な仕掛けを考える必要がある。それだけに、複数回行く甲斐のあることを考えなければならず、企画者とアーティスト双方による実験が今後ますます必要である。

2015/06/23（記録：田辺沙保里）